

ドサンコの生い立ち

八 戸 芳 夫

道南に鯨漁の中心があった頃、漁場の運搬作業に、東北地方の南部駒をつれてきた。それまで北海道には馬がなく、アイヌは馬を知らなかった。

春の漁期が終れば、この連れてきた馬を恰もチリ紙を捨てるように放つぽり出して本州に引き上げてしまい、また翌春になると馬をつれて渡道し、帰るときには捨ててしまうことが繰返えされた。放つぽり出された馬達は厳寒と雪の冬を生き抜かねばならず、またヒグマやオオカミからもがれなければならなかった。このような厳しい劣悪な環境の下に繁殖し現在の小格で持久力抜群の北海道和種馬という品種がつくり上げられた。

「蝦夷国風物語」(天明八年、一七八八年)には、この間の経緯が次のような意味で述べられている。「夏の間は青草があるから飢えることはなく、荒野をほつき歩いているが、冬になると雪がつもると、雪の上にていでいる枯

れススキなどを食っている。さらに厳寒期には、枯れススキさえ全て雪の下になつてしまうので、仕方なく海岸に出て、波にうちよせられたコンブなどの海藻を食っていた……。」

道東では、冬は零下三〇度ぐらいにもなる。そうなれば馬たちにとっては命がけの毎日である。積雪を前肢で掘って、ミヤコザサをみつけることが生きのびる絶対条件になる。脇腹にはツララがいっぱいぶらさがって、走るとそれが林の中にガランガランとなりわたったという。積雪一メートル以上にもなれば、たとえドサンコでも掘りきれなくなる。そうになると、雪の上に首だけ出して、となりにいる馬のタテガミや尻尾の毛さえ食い、弱い馬はすっかり食われてしまつて見るもあわれな姿になつてしまう。立木を切り倒してやると、枝をかじつて食しオガクズのような糞をするというから、彼等の生い立ちは全く苛酷な自然環境下で生き抜けるもののみが生きてきたと言える。

その結果として、耐寒性、耐病性に富んだ粗食に耐える持久力にあふれたすばらしい小格馬が出来たのである。



放牧中のドサンコ群
(亀田郡戸井町)